

堀辰雄と戦時下の『萬葉集』

——なぜ『萬葉集』に魅せられたのか——

大石 紗都子

はじめに

堀辰雄（一九〇四―一九五三）は、モダニズム文学の旗手として昭和初年代にデビューし、ジャン・コクトーやマルセル・ブルーストといった同時代の西洋文学をいち早く紹介した作家の一人だが、昭和一〇年代には古典文学への関心を深めていった。その例として、『かげろふの日記』（改造 昭和二・一二）『ほととぎす』（文藝春秋 昭和一四・一二）『姨捨』（文藝春秋 昭和一五・七）『曠野』（改造 昭和一六・一二）などが知られている。

堀の生前に『萬葉集』を主とする時代小説はついに発表されなかったものの、『大和路・信濃路』（婦人公論 昭和一八・一―八）をはじめ、その影響を思わせる作品はいくつか残されている。さらに『水のうへ』『出帆』が、「ノオト」に類するものと

銘打たれて全集に収められている。

『（水のうへ）』『出帆』の執筆と並行する時期に参照されたとおぼしき堀の蔵書には戦時下を利用された萬葉歌へのまなざしが窺えると同時に、その政治的利用からは距離をとる姿勢も窺い知れる。何より興味深いのは、そのような複眼性を持つ堀の書き込みが、「反戦」か「戦争協力」といった規範で裁ききれない戦時下の人間の心情や時代状況を反映している点である。堀の『萬葉集』への関心は、渡部麻実「堀辰雄」（『出帆』）と『萬葉集』——古の歌を歌うこと、あるいは防人歌を歌わない防人たち——」（『日本近代文学』令和元・一二）が指摘するように、古代の死生観と結びつく挽歌のみならず防人歌にも注がれている。両者が離別の題材に於いて共通するという渡部論の通り、堀の中でそれらは矛盾するものではなかったとみられる。堀の

「ノオト」類や蔵書に残された記述は、離別の悲劇や犠牲を悼むすぐれて人間的な「厭戦」感情が必ずしも「反戦」としては最適化されず、むしろ、ともすれば時局に追従する感情を鼓舞しかねなかったという事態の難しさを浮き彫りにしている。

また、堀のノオトや蔵書から典拠を洗い出した詳細な研究として、渡部麻実「堀辰雄の『萬葉集』受容に関する総合的研究——旧蔵書調査を中心として——」（『戦争と萬葉集』令和三・二）がある。本論はその膨大な成果の中のごく一部に関わるものではあるが、対象の資料や萬葉歌を絞って考察することで、「（水のうちへ）から『出帆』」への経緯を通じてみられる堀辰雄の『萬葉集』受容を浮きぼりにしたい。意外にもそこには、昭和一〇年代の堀辰雄が向き合った古典文学やリルケの影響とは一見するとおよそ異なる、昭和初年代との接続も見出しうる。以上を通じて、堀辰雄が、萬葉歌に伴う当時の一筋縄ではない陰影に目配りしつつも、『萬葉集』をナシヨナリズムや英雄の死の美化に結びつけることなく、時代を越えて読み継がれるものとして再評価した足跡を明らかにする。

一、堀の『萬葉集』受容・および蔵書について

堀辰雄の『萬葉集』受容の傾向として、挽歌や防人歌の他に、巻一六の伝承的な世界への関心がある。たとえば『伊勢物語』へのつながりが見られる例として『魂を鎮める歌』（『文藝』昭和一五・六）の、巻一六・三八一―一三番歌左注と『伊勢物語』

新注との関連が挙げられる。また、『娘捨』は菅原孝標女『更級日記』を題材にした作品だが、そこに鳥が靈魂や遠く離れたものの思いを運ぶ表象といった、萬葉歌・漢詩・西洋文学をつなぐ発想が見られるほか、『今昔物語集』に取材した『曠野』にも柿本人麻呂の萬葉歌、巻三・二六六番歌が典拠となる表現がある。これらの例は昭和一〇年代半ば頃に集中しているが、堀辰雄が萬葉歌を引用する例はかなり早く、『第一散步』（『校友会雑誌』大正一三・九・二〇）に市原王の歌（巻六・一〇四二）が出てくる。^③土佐朋子の論によれば、その訓読と堀の蔵書リストを根拠として、『第一散步』の典拠が、鹿持雅澄『萬葉集古義』（国書刊行会、明治四五年―大正二年）である可能性が高いという。また土佐論では、『死者が山にいう山中他界観』などの発想が『風立ちぬ』（昭和一一・一三）の中に生かされていると指摘されている。同じく『風立ちぬ』の中に萬葉歌の語法に関する理解が見られることを、渡部麻実が指摘している。そのように考えると萬葉歌への関心は、『風立ちぬ』執筆時には既に深まっていたようである。

その他にも近年、戦時下の堀と古代文献との関連について、注目すべき論考が多く提示されている。ごく一部の例を挙げると、小松（小川）靖彦「もう一つの防人像——堀辰雄のノオト（『出帆』）をめぐる（戦争と萬葉集）——」（『文学』平成二七・五・一六）は、堀が個々の防人を無媒介に戦時下の兵士と重ねることはせず、あえて虚構に踏みとどまることによって知性

的に作品世界を作り上げた指摘している。劉娟「堀辰雄における『万葉小説』への憧憬——『花の話・詩経』から『出帆』に至るまで——」（『文学史研究』令和二三）は、『従来の防人像とは殆ど相反的に描出された「防人」たちが登場』し、『《大君》の存在がきわめて希薄なものである』点に注目すると同時に、一個人の防人像に留まらない、防人達の集団的表象には、折口信夫に通じる民族を超えた普遍的な文学の構想が見られる可能性をも指摘している。高橋梓「堀辰雄「十月」に見る「動詞としての文化」——マルセル・ブルースト受容を中心とする国際文化学的考察——」（『近畿大学法学』令和二三）は、偶像崇拜を前に思考停止することを批判したブルーストの方法と堀辰雄『十月』との比較を通じて、文化を新たな創造の母体として活性化させる可能性につなげている。

従来の研究からも、集団と個・伝統と個人の問題に堀の『万葉集』受容が切り結ばれることが窺えるが、あらためてこうした問題を、『（水のうへ）』と『出帆』またこれらに関連するとおぼしき蔵書から検証していきたい。

主として、『（水のうへ）』は萬葉歌の引用からなるもので、B5サイズの松屋製原稿用紙二八枚から成る。おおむね一枚ずつに項目が設けられ、選択された和歌が列挙されている。それに対し『出帆』は小説の草稿に近いもので、B5サイズのフールズ紙に、プロットが書かれたものである。「平刀良」という一八歳の若者が防人として任地に赴き、人々が集って歌う挽歌

や妻恋の歌にふれ、望郷の念や母への思慕を募らせる。彼は「荒蟲」という男の代わりに対馬に向かう船に乗り込むが、嵐に遭い、翌朝に波の中で石を枕にして横たわる死骸として発見される。この結末は、「平刀良」が、手児奈の伝承や、『年老いた海人の身代りに（略）舟に乗つてその儘帰らない漁師のこと』を聞いたという場面が伏線にもなっているのだが、『萬葉集』巻一六・荒雄の物語が素地となつていることも明らかだ。

渡部前掲論（令和元・二）は『出帆』について『（水のうへ）』より後の昭和一九〇二年頃に書かれた可能性が高いことを述べており、小久保実の論を補う形で、使われた紙の発売時期から『出帆』の執筆がたとえ早くとも昭和一五年一〇月以降であることを指摘している。内容的にも『（水のうへ）』は『出帆』の準備段階と見られるため、時系列からも両者の論は首肯できる。加えて、筆跡が比較的はつきりと見られる前者に比べると後者の筆跡はかなり薄く、判読しがたい箇所もある。そうした事情からも、『出帆』は、あるいは堀が体力的に厳しい状況下で書かれたのではないかと推察される。

二、蔵書との関連

本稿では、主として次の八点（いずれも堀辰雄文学記念館蔵）から『（水のうへ）』・『出帆』との関連を考察する。

（一）鹿持雅澄『萬葉集古義』全九冊及び首卷一冊（国書刊行会、大正元・七／大正九・五／初版は明治三二・七）

- (2) 萬葉集 全三冊 (折口信夫、文芸堂書店、大正五・九・六・五)
- (3) 萬葉集 全二卷 (澤瀉久孝・森本治吉著、新潮文庫、昭和二・四)
- (4) 西村眞次『萬葉集の文化史的研究』(東京堂、昭和二六・一〈増訂二版〉)

(5) 『鑑賞短歌大系5 萬葉恋愛歌読本』(北原白秋・折口信夫編、学芸社、昭和一二・七)

(6) 『鑑賞短歌大系6 東歌・大伴集読本』(北原白秋・折口信夫編、学芸社、昭和二二・八)

(7) 武田祐吉『柿本人麻呂』(厚生閣、昭和一三・四)

(8) 武田祐吉『上代国文学の研究』(博文館、昭和五・四／初版は大正二〇・三)

具体的な書き込みや参照時期を特定することは難しいが、(1)と(2)の書き込みには、共通する歌番号が多くはなく、総じて棲み分けの傾向が見られる。このうち(2)の折口口訳の書き込み箇所は、より『(水のうへ)』に取り入れられた歌と共通するものが多いようである。また土佐前掲論の指摘にあるように、少なくとも(1)古義の参照は大正期の『校友会雑誌』への寄稿の頃からすでに行われていたと見られる。(1)には『海ゆかば』の典拠となる卷一八・四〇九四番歌への書き込みが確認できること、(4)に(1)の引用が見られることなどから、(1)は昭和一〇年代以降も継続的に参照されていたと考えられる。

蔵書の書き込みについての詳細は、本稿末尾に別記した資料や、渡部前掲論(令和三・二)を参照されたいが、ここで主としてあらたに指摘したいのは、次の点である。

【A】『曠野』の典拠の一つでもある柿本人麻呂の二六六番歌への関心、(4)西村眞次『萬葉集の文化史的研究』における書き込みと『(出帆)』との親和性などから考えると、堀の萬葉歌の知識が血肉化されたものであること。

【B】(4)西村眞次『萬葉集の文化史的研究』における書き込みと、時代状況への目配り。

【C】荒雄の歌群について、『(水のうへ)』から『(出帆)』への過程で、どのような取捨選択が行われたかを見ることが、堀の萬葉小説の創意図の一端が窺い知れること。

次節以降、以上の点を確認する。

三、堀辰雄の萬葉歌の理解について

先の一点目【A】について、(1)鹿持雅澄『萬葉集古義』第二冊には、歌の表記『淡海乃海。夕浪千鳥。汝鳴者。情毛思努爾。古所念。(アフミノミ。ユフナミチドリ。ナガナケバ。コ、ロモシヌニ。イニシヘオモホユ。』の上に、茶色インクで歌番号を上余白に書き込んだ跡が見られる。『萬葉集古義』には九六番歌の記載箇所にも『心もしぬに古所念』^{イニシヘオモホユ}の用例への言及

があり、堀はそこにも書き込みを施している。(4)西村眞次『萬葉集の文化史的研究』は、『淡海の海夕浪千鳥汝が暗けば心もしぬに古へおもほゆ』(卷三、人麻呂)の余白上に『千鳥』と赤インクの書き込みがある。(7)武田祐吉『柿本人麻呂』には、『淡海の海夕浪千鳥汝が暗けば心もしのに古思はゆ』(卷三、二六六)の歌全体を青で囲んだ形跡に加え、『汝が暗けば心もしのに』を緑で囲んだ形跡が残る。また次の本文記述に茶傍線、上余白に茶の山括弧、二重丸を書き込んだ形跡がある(p166~166)。

《潑刺たる生氣は乏しいが、人間の造り出す芸術美は、此処に窺ふ事が出来るのである。(略)人情を解せざる千鳥に対して、人情を解するかのように取り扱ふ所に、(略)親みの心を持つてゐた古人の生活が現れてゐるのである。(略)「心もしのに」は、心もなえくとなるまでの意で、(略)千鳥の鳴く声に催されて、近江の天津の宮時代の往時を追憶したのである。常は、むしろ忘れてもゐたもの、たま／＼夕の浪に鳴き渡る千鳥の声に、新しい思が催し立てられるのである。(略)すぐれた歌の一つとして数へらるべきは疑を容れない。》

『曠野』において漂泊する女が不意に過去を呼び覚ます場面です。夕波千鳥のイメージが描出されるのであるが、『常は、むしろ忘れてもゐたもの、たま／＼夕の浪に鳴き渡る千鳥の声に、

新しい思が催し立てられる』との箇所への着目からも、無意識的記憶との関連が推察される。⁸⁾

次に、管見の限り従来の研究では指摘されてこなかった、(4)の書き込みをさらに詳しくみておきたい。そこには、昭和一〇年代後半の堀の関心事を知る手がかりがある。⁹⁾

●三八六―番歌〔4〕 p 317

『荒雄らを来むか来じかと飯盛りて門に出で立ち待てど来まきず』(卷十六)

・和歌の傍点は原文

・次の本文記述に赤傍点を書き込み

《これは人が来る、来ないか分らぬ場合に、飯を盛つて置いて、門に出て立つてみると、其人が必らず来るといふ迷信》

●四三七―番歌〔4〕 p 180

・歌の上に赤丸を書き込み

『〇「今日よりは顧りみなくて大君のしこの御楯と出で立つ吾れは」(火長今奉部與曾布)』

●四三八―番歌〔4〕 p 179

・歌の上に赤丸を書き込み
・和歌に赤傍点を書き込み

『〇「旅とへど真旅になりぬ家の母が着せし衣に垢づきにけり」』

《占部蟲磨》

注目すべき点をいくつか挙げたが、荒雄や四三三番歌への着目から時代性が窺えるのに加え、四三八八番歌に関する記述への書き込みに、次のような傍点が付され、堀の理解の程が窺える。

《かうした色々の事情と色々の感情とを以て遠江、以東の諸国から召された防人は、難波津に集り、そこで船を舩ふねして九州に向ふのであつた。出帆の際には京師から慰問使が来たりしたし、船体は美しく飾られたりしたので、防人達はそれらを非常の面目とし、榮譽としたらしい。》

この書き込みは、次の『(水のうへ)』『(出帆)』の四三二九番歌を典拠とした記述と接続するものである。なお、『(水のうへ)』に引用されている巻二〇・四三二九番歌《八十国は難波に集ひ舟舩ふなかざり、我がせむ日ろを見も人もがも》が、『(出帆)』の一枚目の内容と合致することについては、渡部前掲論(令和三・二)に指摘がある。

■『(水のうへ)』二枚目

《難波津 二月末 蘆が散る》

《八十国は難波に集ひ、舟舩ふなかざり、我がせむ日ろを見も人もがも。》

■『(出帆)』一枚目

《出帆

天平二年二月の末だつた。

難波津の諸国から落ちあつた防人たちは、美しい舟舩ふなとまほひをした幾艘いくそうもの大船に分乗して、『眞權しじぬき』水夫を『整へて』掛聲かけこゑも高らかに、『櫂かじひき振ひ、』筑紫の島をさして出帆した》

※【一】部は、噴き出しであとから挿入された箇所。

(4) 179ページ前後の記載には、巻二〇・四三二九番歌のことが言及されているわけではない。しかし、『(水のうへ)』では四三二九番歌が引用され、結果的にそのイメージは『(出帆)』冒頭の素地ともなっている。四三八八番を含む数首の防人歌の解説、《遠江以東の諸国から召された防人は難波津に集り》《船体は美しく飾られたりした》といった箇所から《八十国は難波に集ひ、舟舩ふなかざり》(巻二〇・四三二九番歌)を想起することが可能なほど、堀辰雄の『萬葉集』への理解は深かったようである。

四、蔵書への書き込みと時代状況

蔵書(4)では「海ゆかば」の典拠となる四〇九四番歌(13ページ)に書き込みは無いが、大伴家持の長歌についての書き込みが、別の箇所(181ページ)に見られる。それは先に挙げた、四三三三番歌『今日よりは顧りみなくて大君のしこの御楯と出

で立つ吾れは』の引用以降の記述になるが、次の箇所である。

『今日よりは顧りみなくて大君のしこの御楯と出で立つ吾れは』(火長今奉部興會布)

『天地の神を祈りてさつ矢ぬき筑紫の島をさしていく吾れは』(火長大田部荒耳)

『足柄のみ坂たまはり顧みず吾れは越えゆく、嵐をもたしや憚る、不破の関くえて吾は行く、馬の蹄つくしのさきにちまりゐて吾れは斎はむ、もろくはさけくと申す帰り来までに』(倭文部可良麻呂)

以上三首の中、最後の作者は常陸の一兵士に過ぎないけれど、勇敢な気象が有々と見えていかにも『東男』の面目が躍り出てゐる。近親を恋ひ慕ひながらも、尚ほ国家の爲めに不平も云はずに筑紫に向いて往つたり、或は家郷を忘れて一筋に辺防の大任を尽くさうといふ誠実心を起したる蔭には、さうした犠牲の精神を烈しく鼓吹するものがあつた。天平勝宝七年、筑紫の防人が交替することになつて、新募の東国兵が目的地に送遣せられる時、兵部大輔であつた大伴の氏上大伴家持は、三首までも長歌を詠んで防人らの心を励ました。彼れは強い言葉で『家を忘れよ』とはいはずに、やさしい声で『妻子を思へ』といつて、勇氣と義侠と誠実とに彼等の心を傾向せしめた。情を知る武

士であつたが故に、家持はさうした態度で歌を詠んで、防人らを感じせしめることが出来た。』

この引用箇所の傍点も、堀によるとおぼしき赤の書き込みだが、余白上に《兵部大輔大伴家持、長歌》と赤色で書き込まれた形跡も残っている。この記述は《天平勝宝七年》以降の和歌を指すため、それ以前の天平二年の詔に関わる四〇九四番歌とは、時期を異にする。しかしながら、戦時下の「海ゆかば」の問題に無縁とは思えない。有名な楽曲「海ゆかば」は、決して勇壮で好戦的な楽曲ではなかったにも関わらず、戦時下の状況に連なつていく人々の心を捉えたことがこれまでも指摘されてきた。

「海ゆかば」は大伴家持四〇九四番歌の一節を歌詞とし、信時潔が作曲したもので、昭和十二年(一九三七)十一月一日に出版され、昭和十七年二月一日に国民の歌三部作に指定された。当時、西川恭二郎「万葉集に於ける万人讃仰歌」(「古典研究」昭和一一六)が「海行かば(略)かへりみはせじ」の言立てについて、《実に大伴家が祖先以来誦ひ伝へた家訓でもあり、大君へ忠誠を誓ふ宣言であつて、いまなほ我々を感じせしめずにおかぬ詞である》と述べるなど、時局的な言説も散見する。しかしながら、高木市之助「海行かば」(「吉野の鮎」岩波書店、昭和一一六所収)などは、《路傍に遺棄されて半ば野草に蔽はれた屍と、一对の死の像》、《古武士などに予想する英雄的な最期とは

およそ対蹠的な様相》を指摘し、《それは決して突撃の最中に天皇陛下の万歳を叫びながら莞爾として瞑目するといったやうな「死」の像ではない。》と的確に述べている。

樂曲『海ゆかば』の歌詞も曲調も決して《英雄的》なものでなく、むしろ国家の歴史からうち捨てられたところで没落していく矛盾を顧み、そうした不条理に意味を付与したいとする心情に寄り添いうるものであった。それがために、逆説的に人々の心を捉え、束ねていったということはこれまでも指摘されてきた。^⑩

堀辰雄の書き込みもこうした時代の矛盾を、察知したものと思われる。蔵書(4)の書き込み箇所直後《やさしい声で『妻子を思へ』といつて、勇氣と義侠と誠実とに彼等の心を傾向せしめた。情を知る武士であつたが故に、家持はさうした態度で歌を詠んで、防人らに感奮せしめることが出来た》という記述は、文学を含む、戦時下の芸術や文化の置かれたきわどい状況を図らずも指し示している。人を「自己犠牲」ひいては時局への協力に駆り立てるもののは、決して単純な上からの強制力や当事者の無知といったものでない。それは、その実きわめて人間的な博愛精神に発していたという業の深さを、先の記述が物語る。

なぜおよそ好戦的とは思えない曲調や文脈をもつ『海ゆかば』が人口に膾炙したのか、あるいは、なぜ保田與重郎をはじめとする日本浪漫派の言説が若者達の心を捉え得たのか。今なお

明確な解決方法を提示しがたい、過酷な状況下の制約と人間の尊厳との相剋について、たしかに堀辰雄は問題の本質を捉えていたのだろう。

五、『水のうへ』から『出帆』へ

『(水のうへ)』においてとりわけ注目したいのは、六枚目・九枚目の記述である。

●六枚目

《アイランド》

●九枚目

筑紫

大君の遣はさなくに、さかしらに行きし荒雄ら、沖に袖振る。^⑪
荒雄らを来むか来じかと、飯盛りて門に出で立ち、待てど来まさぬ。

志珂の山いたくな樵りそ。荒雄らがよすがの山と見つづ忍ばむ。

荒雄らが行きにし日から、志珂の海人の大浦田沼は寂しくもあるか

荒雄らは妻子の業をば思はず。年の八年を待てど来まさぬ。
沖つ鳥鴨とふ舟の帰り来ば、也良の防人早く告げこそ。

沖つ鳥鴨とふ舟は也良の崎廻みて漕ぎ来と聞かれ来ぬかも^⑫

大君の命令のためではなく、自らの意思で志願して沖に乗り出した荒雄の向こう見ずな行爲とその悲劇を述べた歌群に、堀辰雄が注目している点は興味深い。引用された歌は順に、三八六〇・三八六一・三八六二・三八六三・三八六五・三八六六・三八六七番歌である。三八六四番歌は三八六〇番歌と、三八六八・三八六九番歌は三八六七番歌と、それぞれ趣向が類似するため省かれたものとみられる。以上の引用歌上の余白に、《長い別離は生と死とを一つにする》と書いて鉛筆で抹消してある。六枚目の《アイルランド》という記述は、卷一五・三六六〇番歌（土師稲足）の引用《神さぶる荒津の崎に寄する波、間なくや、妹に恋ひ渡りなむ》（恋ひつつ）の末尾二字を抹消して「恋ひ渡りなむ」と書かれている、卷一五・三六五二番歌の引用《志珂の海人の一日も落ちず焼く鹽のからき恋をも我はするかも》などが引かれた箇所之余白に、茶色で書かれたものである。

この六枚目の記述も、筑紫で故郷を恋慕う歌や、舟の安全を祈願する「荒津」が読まれる歌、《志珂の海人》の表現などから、九枚目の荒雄の歌とも通ずるものがある。《アイルランド》とあるのは、アイルランドの詩人イェイツ（William Butler Yeats 1865-1939）を連想させるという点があり、抹消された《長い別離は生と死とを一つにする》という九枚目の記述も、大地や死者、自然との合一によって人間が完全となるというヨーロッパの伝統的な発想に牽引されたイェイツの世界観に通ずるものだったのではないだろうか。

死と生に交通を見る発想は、日本の戦時下の文脈ではあまりに切実なものとなってしまうがために、抹消されたのかもしれない。だがその実、イェイツに通ずる民族の伝承的世界は、堀の折口信夫への関心とも矛盾するものではないようだ。それは戦争によって問題を歪曲するのでも忌避するのでもなく、生と死を見つめるという問題意識において東西の世界をつなぐずぐずれて文学的なビジョンにもなりうるものだった。堀辰雄『随筆ノオト』¹³には「イェイツ」の作品世界・日本各地の伝承的世界・光源氏の漂泊・《遊女の墓（しなのおひわけ）》・《心もしぬに古思ほゆ》という二六六番歌の引用・日本や西洋の作家の名前など、有名無名を含む様々な人物や事物が併記されている。こうした文学的発想が、世界的集团的記憶として人間存在に根ざしていることを折口や堀は、考えていたのだろう。¹⁴拙著（前掲書）に述べたとおり、堀は古典文学・西洋文学・中国の漢詩の交差点として、鳥の飛翔を彼岸と此岸の通行になぞらえる表象を見出し、『娼捨』の中に描いている。さらに遡るならば、昭和初年代の『羽ばたき』（原題「羽搏き」『週刊朝日』昭和六年六月二日）などにもその萌芽を見出すことができる。

さらに外国文学への回路という点で、小谷恒「堀辰雄と折口信夫」（『日本文学研究資料叢書 堀辰雄』有精堂、昭和四六・八）に指摘されたリルケ『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』と『（出帆）』の關係が挙げられる。この点は渡部前掲論（令和元・一二）によると、表現上の類似があるものの歌が形作る連帯の有無に

よつて、両者は異なる性格を持つという。リルケ『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』と『出帆』は、相違点もあるものの、一八歳の青年が登場するという設定や母への思いが描かれる場面、誰にも縛られない自らの「死」を全うする孤独な結末などに共通点がある。『出帆』もまた、『萬葉集』に取材しながら極めて西洋的なテクストであったといえる。そのことは、『出帆』が堀の初期作品と共通点を多く持つことから指摘できる。

『出帆』の「平刀良」が、群からはどこか疎外された異質な存在として描かれること、母への思いに牽引された、想像の世界への情熱に駆り立てるように無謀な死を遂げることなどは、『羽ばたき』にも酷似する¹⁵。悲劇に終わる結末が、限界以上のものに挑む人間の生な情熱をも浮き彫りにするという点で、内的世界の可能性を示唆する一方、そうした死の虚構化というロマンティズムだけではすまされないことも事実だ。しかしながら、戦時下の終盤に書かれたとおぼしき『出帆』がその実、ジャン・コクトーの影響下に書かれた作品とも通ずる点は注目に値する。『羽ばたき』は戦後、刊本に収められる際に「メルヘン」を意味する副題“Ein Märchen”を付されるが、その冒頭は伝説を物語るものであり、東西を超えた「古典」ともいうべき、普遍的な文学を築く堀の志向は、すでに現れている。その点で堀の創作意図には戦前戦後を通じて一貫するものがあつたとさえ思われる¹⁶。

また、荒雄に関する歌群のうち、彼の帰還を願う主情的な要素は、『水のうへ』から『出帆』の過程で捨象されている。『出帆』に活かされるのは三八六番歌に関連する、『平刀良の乗り込んだ船は「鴨」といふ名前の船だつた』といった客観的な説明のみである。書き手の心情を反映する和歌から、主観性を潜めるところにまで『出帆』の視点は後退させられている。

そこでは、文体の視点という次元のみならず、堀の作家性・固有性までもがえて後退させられているようである。これまでの東西をまたぐ文学の受容に鑑みるならば、むしろ自らの作家性を後退させることで、堀は、時代を超えて残りうる文学を築こうとしていたように思われる。そうした主情の後退は、主客が分け隔てなく同時に存在する世界を響かせる萬葉歌の語法とも、どこか通ずる。自分が見るとき相手も自分を見ているという発想、自身が背後に引き受ける事物の目から見たかのような客体的な描写で以て、他ならぬ自身の思いを伝えるという極めて萬葉的な発想を、『出帆』の文体は体得しつつあつたのかもしれない¹⁷。

しかし忘れてならないのは、完全なる「古代」には戻れないという自覚をも『出帆』が同時に響かせていた点だろう。先に触れた初期作品の『羽ばたき』も『出帆』も、疎外や孤独と隣接する、夢想の危うさと内的世界の充実という両面性を描くが、そのような何らかの物語化なしに、「死」を受け入れることができない実存性があることも同時に物語っている。

「平刀良」の死は、大君のような存在ではない「荒蟲」のために命を懸けた結果である。観点を変えれば、それは名も無き一人の人間すらも、命を懸けて守るに足る存在である、ということを知らしめる。むしろそう考えなければ「平刀良」は報われない。そう考えざるをえないほどに、我々は死の意味づけという発想から無縁でなくなっている。「出帆」が描くのは、すでにそうした観念から逃れられなくなった、前近代的でありながら近代に親しい世界なのだ。

堀のノオトは、『出帆』の時代に於いても手児奈など巻一六の伝説がすでに過去のフィクションとして語られていること、『妣ノ国』や『魂のフルサト』（『水のうへ』）が言い伝えや想像の中にしか存在しないということを描き出している。『出帆』が物語るのは、復古的な気分や伝統の称揚ではなく、死後の世界と生の現実とが接続していた過去すなわち古代人が死への恐怖から解放されていた過去への憧れであり、古代に於いても当時にとつての更なる「古代」が存在するということである。『出帆』における「平刀良」の死が象徴するのは、生と死が相剋しない安らかなものとして存在しえた時代へのあこがれと決別だった。だからこそ「平刀良」の死は、誰にも犯されない彼固有のものであると同時に、「妣ノ国」との連帯からは疎外されている。

蔵書（8）武田祐吉『上代国文学の研究』（博文館、昭和五・四／初版は大正一〇・三）の92～93ページには、挟み込みの形跡があ

る。そこにはたとえば、『仏教思想の流通と共に、漸く古代の現在主義より脱して、前徴を信じ運命の循環を怖るゝに至つた人の心に、殊に強く響くものは死亡である。有を有とし、無を無とする現在主義の古代思想より出発して、生者必衰のあきらめの態度に至らない中間の漂泊は、慟哭の海である。文明の光に照されて一度失へるものの再得られぬ事を知つた時に、古代人のやうに、赤子のやうに、此に失へるものを他に補ふ事は簡単に出来ぬ』との記述がある。ここでは死へのナイーブな親しみを失つていく古代の観念が指摘されている。⁽¹⁵⁾

古代がすでに近代の日本に於いては遡るべきルーツでなく、あくまでも異世界なのだという観点は、堀辰雄『ふるさとびと』（『新潮』昭和一八・一）が、寂れていくもの・消えていくものの存在を示唆する点とも矛盾しない。その発想は戦後の『雪の上の足跡』（『新潮』昭和二二・三）が、いずれ雪溶けと共に消滅する足跡を題名としている逆説からも窺えるように思われる。

おわりに

堀辰雄『出帆』にまつわる書き込みや蔵書群は、古代への憧れと断絶、連帯への希求と個の尊厳との切り結ばれ方など、戦時下における止揚の複雑さをも物語るものだった。蔵書の記述や書き込みが示す多角的な問題意識を顧みるならば、最後まで戦争協力的な作品の執筆を拒んだ堀自身にあつても、「反戦」や「抵抗」が唱えられるという高みの立場に自らを置くような

特権化を許すことはなかっただろう。当時の状況が安易に二元化できないものであればなおのこと、堀辰雄が専ら「抵抗」の側であつたと言いつけるべきではなく、二元的な規範に裁ききれない状況下に堀文学が持ち堪え続けたことにこそ、考察すべき点がある。

戦後の日本人は、我々の現在の生活が、巨視的に見れば多くの先人の献身と犠牲の上に成立しているという言わずもがなの真実を、純粹な尊敬や感謝のみでは語れなくなったのかもしれない。しかし先祖や死者への畏敬の念を語ることそれ自体を、ナシヨナリズムやロマンティシズムの現れだとして無批判に忌避することもまた、事態の単純化に他ならない。むしろ戦前戦後の断絶を含んだねじれを複雑かつ永遠的な問いとして引き受ける覚悟がなければ、短絡的な答えを求めるだけの水掛け論になってしまう。

堀の『萬葉集』受容の足跡もまた、今なお、我々が「戦争」の反省を乗り越えていないということ、二度と過ちを起さずにはまいけないという驕りの上にあぐらをかけないことを示唆するものであり、終わりのない問いに目を啓くことの必要性を物語るものなのである。

【巻末資料】堀辰雄の蔵書について

※別表および以下に挙げた歌の選択については必ずしも厳密な基準によるものでない。そのため、まだ吟味できてない点も多いが、昭

和一〇年代後半の作品に鑑みて、当時の堀の関心が窺えるとおぼしきものを何点か試みに抽出した。

※本文中の萬葉歌の引用は、堀辰雄のノオトや蔵書の表記を引用したが、便宜上、『萬葉集』（新日本古典文学全集 全四冊（小学館、平成六・五・八・八））に依つたものもある。萬葉歌の引用に際して、長歌の一部や題詞・左注など、適宜割愛した箇所がある。蔵書の内容や書き込みについても、従来の研究に既出のものなどは適宜割愛している。

(1) 鹿持雅澄『萬葉集古義』全九冊及び首卷一冊（国書刊行会、大正元・七／大正九・五／初版は明治三一・七）

(2) 萬葉集 全三冊（折口信夫、文芸堂書店、大正五・九・六・五）

(3) 萬葉集 全二卷（澤瀉久孝・森本治吉著、新潮文庫、昭和一二・四）

(4) 西村真次『萬葉集の文化史的研究』（東京堂、昭和一六・一（増訂二版））

(5) 『鑑賞短歌大系5 萬葉恋愛歌読本』（北原白秋・折口信夫編、学芸社、昭和一二・七）

(6) 『鑑賞短歌大系6 東歌・大伴集読本』（北原白秋・折口信夫編、学芸社、昭和一二・八）

(7) 武田祐吉『柿本人麻呂』（厚生閣、昭和二三・四）

(8) 武田祐吉『上代国文学の研究』（博文館、昭和五・四／初版は大正一〇・三）

● 卷二・二二六、二二七

※次の表記は『萬葉集』〈新日本古典文学全集〉による。

「石川女郎贈 大伴宿祢田主歌一首」

二二六 遊士跡 吾者聞流乎 屋戸不_レ借 吾乎還利 於曾能風
流士

「大伴宿祢田主報贈一首」

二二七 遊士尒 吾者有家里 屋戸不_レ借 令_レ還吾曾 風流士
者有

《みやびをと 我は聞けるを やど貸さず われを帰せり おその
みやびを》(一二六)

《みやびをに 我はありけり やど貸さず 帰しし我そ みやびを
にはある》(一二七)

昭和一八年頃より、皇室賛美の文脈で「みやび」の語が広く用いられる現象がみられるが、当該歌は「みやび」と訓読される語が、「宮び」の文脈にとどまらない多義性をも物語るものの一つである。「みやび」が反俗的・周縁的な意味など、およそ皇国史観とは相反する語史ももつという奥行きについては、『伊勢物語』初段などからも指摘しうるが、堀は『伊勢物語』の注釈書などからそれらを知っていた可能性も高い。本稿では、一二六・一二七番の書き込みの確認に留め、「みやび」の語義と堀の関心との関わりについては別稿で考察したい。

なお、当該歌「遊士」「風流士」の読みは、契沖以前「たはれを」と訓読していたが、荷田春満以降、異説「みやびと」が提示され、本居宣長が「みやびを」と訓読している。^⑩

* 【(一) 一 p 447】

・歌の上に《(一二六)》と黒インクで書き込み

《遊士跡 吾者聞流乎 屋戸不借 吾乎還利 於曾能風流士》(ミヤビヲト アレハキケルヲ ヤドカザズ アレヲカヘセリ オンノミヤビヲ)

・次の解説の傍線は蔵書の書き込み。

《岡部氏が、六巻に、諸大夫等、集左少弁云々家宴歌とて、うなはらのとほき渡_リを遊士の遊ぶをみむとなづさひそ来し、てふ歌の左に、右一首云々、蓬萊仙媛所作襄綾爲「風流秀才之士」矣と書り、》

《おろかにおとれる人を、おそき人といへば》

* 【(5) p 21】

歌の説明全体を赤丸で囲っている。

《遊士と吾は聞けるを、屋戸貸さず 吾を還せり。鈍の風流士》

《遊士に吾はありけり。屋戸貸さず還し、吾ぞ。風流士にはある》

* 【(6) p 155】

一二六・一二七番歌に関する本書の記述の始めと終わりを緑カギ括弧で括っている。

《遊士と 吾は聞けるを。やど貸さず 吾を還せり。おその風流士》
《遊士に 吾はありけり。やど貸さず 還せる吾ぞ 風流士にはあ

る》

● 卷二・二二一

※次の表記は、堀辰雄『出帆』（一七枚目）に、青鉛筆で書かれたものを引用。

《沖つ浪来寄る荒磯^{ありぞ}をしきたへの枕とまきて寝せる君かも》（柿本人麻呂）

柿本人麻呂による挽歌（石中死人歌）であり、『水のうへ』『出帆』両者に反映されている歌のうち、蔵書への書き込みも見られるという、限られた例の一つである。^②また、『出帆』の結末に直接引用された歌であることから、蔵書の書き込みを確認した。

*【(1) 二 p 56】二二三番歌・茶インク 赤線

*【(3) 上 p 58】二二〇、二二一番歌に書き込み・茶インク

*【(7) p 178】182】

・二二〇～二二三番歌を扱った記述に多く書き込みが残る。

・二二〇番歌中《神の御面^{みおもて}》に茶鉛筆の囲み

・二二〇～二二三番歌全体の記述に青鉛筆の囲み

・次の本文記述に緑傍線書き込み

《しかもこの場合には、妻は夫の死んだのも知らずに、虚しく待ち恋うてゐるのである。（略）全体の構成としては、讃岐の国の叙述はさすがに壮大に出来てゐる。それから転じて、石中の死人を見るに至るまで、息を入れない面白さがある》

・次の本文記述に茶傍線書き込み、上余白に茶の山括弧、二重丸書き込み

《この死人は、或るいは（略）妻が居たらこれを看護して、食物をも與へたであらうといふ歌である。その島の徒に伸びてゐる菟芽^{うゑ}子を材料として、歌ひ来つたところに、深い感慨を与へるものがある。優れた歌である》

● 卷三・二六六『曠野』に当該歌のイメージがあることから、蔵書の書き込みを確認した。

*【(1) 二 p 116】

・次の歌の上に、茶色インクで歌番号を上余白に書き込み
《淡海乃海。夕浪千鳥。汝鳴者。情毛思努爾。古所念。（アフミノミ。ユフナミチドリ。ナガナケバ。コ、ロモシヌニ。イニシヘオモホユ。）》

・古義には九六番歌の記載箇所にも《心もしぬに古所念^{イニシヘオモホユ}》の用例への言及があり、堀はそこにも書き込みを施している。

*【(4) p 272】

・余白上に《千鳥》と赤インクで書き込み

《淡海の海夕浪千鳥、汝が暗けば心もしぬに古へおもほゆ》（卷三、人麻呂）（傍点原文）

*【(7) p 164】

・《淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬに古思ほゆ》（卷三・二六六）の歌全体を青で囲み

・《汝が鳴けば心もしのに》を緑で囲み

・本文記述に茶傍線、次の本問箇所の上余白に茶の山括弧、二重丸書き込み

《潑刺たる生氣は乏しいが、人間の造り出す芸術美は、此処に窺ふ事が出来るのである。(略)人情を解せざる千鳥に対して、人情を解するかの如くに取り扱ふ所に、(略)親みの心を持つてゐた古人の生活が現れてゐるのである。(略)「心もしのに」は、心もなえ／＼となるまでの意で、(略)千鳥の鳴く声に催されて、近江の天津の宮時代の往時を追憶したのである。常は、むしろ忘れてもゐたもの、たま／＼夕の浪に鳴き渡る千鳥の声に、新しい思が催し立てられのである。(略)すぐれた歌の一つとして数へらるべきは疑を容れない。》

● 卷三・四六〇

※次の表記は『萬葉集』『新日本古典文学全集』による。

「七年乙亥大伴坂上郎女悲歎尼理願死去 作歌一首 并短歌」

《(前略) 生者 死云事尔 不_レ免 物尔之有者 憑有之 人乃尽 (略) 春日野乎 背向尔見乍 足水木乃 山辺乎指而 晚闇跡 隠益去礼 (後略)》

《(前略) 生ける者 死ぬといふことに 免れぬ ものにしあれば 頼めりし 人のことごと (略) 春日野をそがひに見つつ あしひきの 山辺をさして 夕闇と 隠りましぬれ (後略)》

大伴坂上郎女の挽歌であるが、人間の死の必然性をも凝視する内容や、「そがひ」の語などが着目されることから、蔵書の書き込みを確認した。ただし当該歌の書き込み単独では、関心の所在を特定することは今の段階では難しい。

*【(2) 上 p 143】 四六〇番歌・緑○印 傍線
*【(6) p 173】 四六〇番歌・赤書き込み 緑線

● 卷一六・三八六〇～三八六九

堀辰雄が、平安時代以後の文学の関わりにおいても注目した卷一六中の歌であり、義侠心によつて自ら海に乗り出した結果、帰らぬ人となったという荒雄の物語を描いている。『(出帆)』の内容と親和性の高い内容で、かつ『(水のうへ)』への引用も見られることから、蔵書の書き込みを確認した。

*『(水のうへ)』引用歌は本稿の中で紹介

*【(2) 下 p 35】 三八六〇～三八六九番歌・赤や緑による書き込み
*【(4) p 317】

・和歌の傍点は原文
《『荒雄らを来むか来じかと飯盛りて門に出で立ち待てど来まさず』 (卷十六)》

・次の本文記述に赤傍点書き込み
《これは人が来る、か来ないか分らぬ場合に、飯を盛つて置いて門に出、出て立つてゐると、其人が必ず来るといふ迷信》

● 卷一七・三八九六

※次の表記は、堀辰雄『水のうへ』（一枚目）に、赤鉛筆で書かれたものを引用。

《家にても／たゆたふ生。／波の上に浮きてしをれば、／おくが知らずも。》（作者未詳）

『出帆』（六枚目）では、『波の上に浮きてしをれば／おくが知らずも』とある。

『水のうへ』『出帆』両者に反映されている歌のうち、蔵書への書き込みも見られるという、限られた例の一つであることから、蔵書の書き込みを確認した。

*〔2〕下 p 48 三八九六番歌・赤●の書き込み

*〔3〕下 p 456 三八九六番歌・青○の書き込み

*〔6〕p 220

・緑傍線やカギ括弧による書き込みがみられる。

歌の上に緑で印、▲□書き込み

《▲家にても「たゆたふ」命、波の上に漂きてしをれば、奥処知らずも》

《○たゆたふ 動揺する。浮動し易い。人間の靈魂の不安をいふのだ》

《古代人の信仰と恐怖で掩うて居る》

● 卷一八・四〇九四 戦時下において人口に膾炙した楽曲「海ゆかば」

の典拠となる歌で、時代状況への目配りが窺える点から、蔵書の書き込みを確認した。

*〔1〕七 p 52

・題詞上の余白に青い点を付し、その点をさらに赤で囲んでいる。
・次のように歌にカギ括弧「」が書き込まれている。

《『海行波美豆久屍、山行波草牟須屍、玉乃略爾去曾死米』能楞爾波不死、止》（ウミユカバミヅクカバネ、ヤマユカバクサムスカバネ、オホキミノヘニコソシナメ、ノドニハシナジト）

*〔3〕下巻 p 544

・次のように歌にカギ括弧「」が書き込まれている。

《大伴の造つ神祖の其の名をば 大来目主と 負ひ持ちて 仕へし官 海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大皇の 辺にこそ死なめ 顧みは 為しと言立て」大夫の》

● 卷二〇・四三七三 天皇への忠誠や献身を連想させる歌として戦時

下に広く知られた歌であり、時代状況への目配りが窺える点から、蔵書の書き込みを確認した。

*〔2〕下 p 247 赤●の書き込み

*〔4〕p 180

・歌の上に赤丸を書き込み

《○「今日よりは顧りみなくて大君のしこの御楯と出で立つ吾れは」
（火長今奉部與曾布）》

●巻二〇・四三七五

*【(2) 下巻 p 247】

《松の木の並みたる見れば、家人の我を見送ると、立たりしところ》
(物部真鳥)

・歌の《並みたる》という表記を《撓みたる》に、本文語釈の《並んで》を《ぐんにやりと》に、それぞれ緑で書き換えた跡がある。
折口の口訳についても、堀は単なる鵜呑みではない方法を以て臨んだことが窺える。

●巻二〇・四三八八 家族との離別を歌う歌であり、『出帆』に反映されている歌のうち、蔵書への書き込みも見られるという、限られた例の一つであることから、蔵書の書き込みを確認した。

*【(2) 下巻 p 251】 四三八八番歌・赤●の書き込み

*【(4) p 179】

・次のように傍点が書き込まれている。

《旅へとと真旅になりぬ家の母が着せし衣に垢づきにけり》(占部蟲麿)

注

(1) 原題『魂を鎮める歌——いかに古典文学に対するかとの間に答へて』。初刊『雉子日記』(河出書房、昭和一五・七)では、『魂を鎮める歌——いかに古典を読むかとの間に答へて——』と改題。さらに『曠野』(養徳社、昭和一九・九)収録の際、『伊勢物

語など——いかに古典を読むかとの間に答へて——』と改題。

(2) 『魂を鎮める歌』『嫉捨』『曠野』の典拠等については、拙著『堀辰雄がつなぐ文学の東西 不条理と反語的精神を追求する知性』(晃洋書房、平成三一・三) および、拙稿『堀辰雄と今昔物語集折口信夫との関連』(『四季派学会論集』第二五集 令和三・三)の中で触れた。

(3) 本文中に『一松、幾代可歴流、吹風乃、声之清者、年深香聞』とある。
ヒトマツ イクヨカヘスル フクカゼノ コエノスメルハ トシフカミカセ

(4) 土佐朋子「堀辰雄『風立ちぬ』と『万葉集』——「死者の山」「黒髪雪」など——」(『東京医科歯科大学教養部研究紀要』第四八号、平成三〇)。なお土佐論によると、『風立ちぬ』終章「死のかげの谷」には、鳥と鎮魂を結びつける発想や山中他界観が指摘できるのに加え、冒頭の「序曲」には『死者のようになつて、節子の視線に自らの視線を重ね、山の稜線を眺めている』(『木陰に横たわる「私」』の表象が見出されるという)。

(5) 『風立ちぬ』を構成するそれぞれの章の初出は、以下の通りである。「序曲」(『改造』昭和一一・一二、原題『風立ちぬ』中の「発端」・「春」(『新女苑』昭和一二・四、原題『婚約』・「風立ちぬ」(『改造』昭和一一・一二、原題『風立ちぬ』中の「I」「II」「III」・「冬」(『文藝春秋』昭和一二・一)・「死のかげの谷」(『新潮』昭和一二・三)。その後、『風立ちぬ』(『冬』のみが個々に独立した短篇で『風立ちぬ』(新潮社、昭和一二・六)に掲載され、『風立ちぬ』(野田書房五百部限定版、昭和一二・四)で初めて五章構

成の作品として収録された。

- (6) 『堀辰雄』風立ちぬ、いざ生きめやも——『風立ちぬ』から『万葉集』へ、『万葉集』から『風立ちぬ』へ——〔『国文目白』五二号、平成二五・二〕

- (7) 『古典ノオトの解説』(角川書店版『堀辰雄全集 一〇』昭和四〇・一二)

- (8) 『曠野』と当該歌、無意識的記憶との結びつきの可能性については、拙著『堀辰雄がつなぐ文学の東西』(前掲書)に指摘した。

- (9) 渡部前掲論(令和三・二)では、『ほとんど記号・傍線のため、筆跡の確認は難しい』とのことで書き込みの紹介は割愛されていたが、内容から堀が強く関心を抱いたとおぼしき歌などを、ここでは挙げた。

- (10) 一例を挙げるならば、新保祐司編『海ゆかば』の昭和(イ)ブシロン出版企画、平成一八・一二)、丸山隆司『海ゆかば——万葉と近代——』(刈アヴァン札幌、平成二三・三)、小松(小川)靖彦「大伴氏の言立て「海行かば」の成立と戦争下における受容——その表現および戦争短歌を通じて(戦争と萬葉集)——」〔『国語と国文学』平成三〇・七)などに重要な指摘がある。

- (11) 『堀辰雄全集』では筑摩書房版、角川書店版とも「袖ふる」と翻刻されているが、実際には「袖振る」と漢字表記である。

- (12) 引用末尾の二首三八六・三八六七に関して、『堀辰雄全集』では筑摩書房版、角川書店版とも「世良」と翻刻されているが、実際には「也良」と書かれている。また、三八六七冒頭は、正

しくは「沖つ鳥」だが、ノオトでは「沖つ鳥」と筆記していると見られるため、本稿では「鳥」として翻刻した。末尾は『堀辰雄全集』では筑摩書房版、角川書店版とも「来ぬか」と翻刻されているが、実際には「来ぬかも」と書かれている。

- (13) 無罪の小型手帳に鉛筆で横書きされたもの。表紙には「随筆ノオト(支那文学)」とあり、「支那文学」の一行だけ抹消されているという。内容は角川書店版『堀辰雄全集 八』(昭和三九・一一)より引用した。

- (14) 折口の研究における姿勢が、戦争に揺らぐことなく民族や対象の核心を見定める志向を持つことは、劉娟前掲論、小松靖彦・中西亮太対談「戦争下の文学者たち(花鳥社)をめぐって」〔『図書新聞』令和四年二月二六日)などに示唆されている。

- (15) 『羽ばたき』では、少年ジジが、鳩を亡くなった母の転生であるかのように見なし、子供達の遊びから外れて鳩と遊ぶようになる。最後にジジは、鳩の飛翔を真似て塔の上から飛び立ち、墜落する。『羽ばたき』については、拙稿「堀辰雄『羽ばたき』の時代的意義と多面性——ジャン・コクトー、アンリ・ポアンカレ、トボロジ——」〔『国語と国文学』令和五・二掲載予定)、および「堀辰雄『羽ばたき』Ein Märchen」と鳩山郁子漫画——コミカライズの可能性——」〔『武蔵野美術大学研究紀要』五三号令和五・三掲載予定)に触れた。

- (16) 渡部前掲論(令和元・一二)は「戦意高揚にも、また抵抗にも関与しない」、《戦時下という特殊な時間と空間に繋がらない》

文学作品として「(出帆)」が準備された可能性を示唆している。

- (17) 永藤靖「万葉・「ソガヒ」に見る」考(『文化継承学論集』平成二・三)は、「ソガヒ」の語義を検証しており、事物から遠ざかる際には背後にあつて見えないはずのものを詠み手が「ソガヒに見る」と表現するとき、背後の事物の目を借りて描写するような発想が働くことを指摘する。

- (18) なお本書には、「伊勢物語と巻十六」の項目に赤い印が書き込まれており、ここから巻一六への関心も裏付けられる。本文中には《万葉集巻第十六が、伊勢物語の直接の粉本では無いにしたところで、必同種のものがあつて、それに倣つて、恋をもとめつ、道の奥まで下つた在原業平の歴史は綴られたに違ない》(P 206)といった記載がある。

- (19) 「みやび」の概念をめぐる近世の諸注については、鈴木淳「みやびを考」(『國學院雑誌』平成一八・一一)に詳しい。

- (20) 『水のうへ』・『(出帆)』に反映された和歌のうち、いずれかの蔵書中に書き込みが施されているものは、数える程しかない。つまり、現存する蔵書に書き込みが残っていないくても堀辰雄が着目した和歌は、数多くあるといえる。『(出帆)』に反映された二〇首ほどのうち、蔵書に書き込みがあるものとしては、巻二・二二二、巻六・九一九、巻一六・三八六六、巻一七・三八九六、巻一四・三五七〇、巻二〇・四三七五、巻二〇・四三八八が確認できる。

- (21) 小松(小川)靖彦「日中戦争下における「醜の御楯」の意識

——聖戦短歌を通じて(戦争と萬葉集)——」(『日本文学』平成二七・五)では、当該歌が日中戦争期を通じて名歌として普及し、太平洋戦争開戦時には、防人歌の代表例として広く知られるに至っていたことが指摘されている。

【付記】堀辰雄の蔵書については堀辰雄文学記念館の方々より、閲覧の機会を戴きました。皆様の御厚意に、改めて深く感謝を申し上げます。なお本研究はJSPS科研費・若手研究 JP22K13042の助成を受けたものです。

(おおいし・さとこ／武蔵野美術大学准教授)

【別表】

資料名

- (1) 鹿持雅澄『萬葉集古義』全九冊及び首巻一冊（国書刊行会、大正元・七～大正九・五／初版は明治三一・七）
- (2) 萬葉集 全三冊（折口信夫、文会堂書店、大正五・九～六・五）
- (3) 萬葉集 全二巻（澤瀉久孝・森本治吉著、新潮文庫、昭和一二・四）
- (4) 西村真次『萬葉集の文化史的研究』（東京堂、昭和一六・一〈増訂二版〉）
- (5) 『鑑賞短歌大系5 萬葉恋愛歌読本』（北原白秋・折口信夫編、学芸社、昭和一二）
- (6) 『鑑賞短歌大系6 東歌・大伴集読本』（北原白秋・折口信夫編、学芸社、昭和一二）
- (7) 武田祐吉『柿本人麻呂』厚生閣、昭和一三・四
- (8) 武田祐吉『上代国文学の研究』博文館、昭和五・四（初出は大正一〇・三）

※『水のうへ』の典拠とおぼしきものは○、『(出帆)』の典拠とおぼしきものは●を付した。

※書き込みについて、表では筆記具に関わらずおおよその色を付記した。詳細は渡部前掲論（令和三・二）、本稿等を参照されたい。

※表中（1）～（8）では、書籍は略称を用いた。

短歌・備考	(1) 古義	(2) 折口口訳	(3) 類別	(4) 西村	(5) 鑑賞短歌5	(6) 鑑賞短歌6	(7) 武田、 人麻呂	(8) 武田、 上代
	*挟み込み あり	*挟み込み あり	*挟み込み あり	*挟み込み あり *巻第一六 への関心				*挟み込み あり *古代の死 生観の変化 への関心 *巻第一六 への関心

卷二 【一二六、一二七】 ※みやびを、相聞歌	赤緑				赤囲み	緑括弧		
卷二 【一二二】 ○● ※石中死人歌、挽歌	茶（歌番号）、 赤		※関連する 二二〇・二 二二一番に茶 色の書き込 み				茶、赤、青、 緑	
卷三 【二六六】 ※夕浪千鳥、雑歌	茶（歌番号）、 赤			赤《千鳥》			茶、青、緑	
卷三 【四六〇】 ※挽歌（長歌）	茶 ※【九六】 番歌記載箇 所に残る（赤 緑）に、当 該歌との関 連が窺える。	緑				赤、緑		

卷一六 ○● 【三八六〇～六九】 ※荒雄		赤、緑		赤				
卷一七 【三八九六】 ○● ※波の上における精神的動揺、不安 ※雑歌		赤	青		緑			
卷一八 【四〇九四】 ※時局との関わり (「海ゆかば」) ※雑歌 (長歌)	赤、青		赤	四〇九四番歌の引用箇所 (p133) に書き込みは残っているが、後年の大伴家持の長歌に關する書き込みが別の箇所 (p181) に見られる。 赤				

卷二〇 【四三七三】 ○ ※時局との関わり ※防人歌		赤		赤					
卷二〇 【四三七五】 ● ※防人歌		黒、緑							
卷二〇 【四三八八】 ● ※長旅による家族との 離別 ※防人歌		赤		赤					